

水稻コスト低減実証ほ現地検討会を開催（世羅町）

【平成 28 年9月8日掲載】

東部農業技術指導所は、8月25日、世羅町で水稻コスト低減実証ほ現地検討会を開催し、世羅町及び尾道市御調町の集落法人等26名が参加しました。

検討会では、水稻のコスト低減・収益性の確保を目的として設置した①密播苗箱削減によるコスト低減実証ほ、②飼料用米「夢あおば」の現地適応性と鶏ふん利用による低コスト施肥体系確立実証ほについて生育状況を確認しました。



【各種実証ほの概要説明（座学研修）】

密播苗箱削減とは、慣行の1.5～2倍量を播種した密播苗箱を利用することで10a当たりの苗箱数を従来の1/2程度に減らす技術で、育苗・田植え労力の削減にもつながる技術として注目されています。

一方、「夢あおば」は、従来の多収性専用品種に比べ短稈、早熟であるため、家畜ふん堆肥の積極利用が可能であるとともに、成熟期後30日間程度、圃場内で立毛状態を保持することによって、籾乾燥のコスト低減が可能といったメリットも期待できる品種です。

（農）さわやか田打（岡田以得（おかだ いとく）代表理事 組合員数58名）で実証した密播苗箱削減技術については、「密播の方が穂が長いのではないか」、「慣行栽培と遜色ない。」といった感想が多く、収量や品質に高い関心が寄せられました。

実証ほを設置した（農）さわやか田打の岡田代表理事からは、「収量・品質面で慣行と遜色なければ、確実に省力・コスト低減につながる技術であるため、29年産から技術導入をしたい。」と新技術導入に前向きなコメントがありました。

また、（農）くろぶち（長久信（ちょうきゅう きわむ）代表理事 組合員68名）で実証した「夢あおば」の実証ほでは、現時点での収量見込み及び鶏ふんの散布時期についての質問や「短稈なのでコンバイン収穫時の負荷が少なそう。」といった感想がありました。



【密播苗箱削減実証ほ現地検討の様相】

両技術とも、導入の大きな鍵を握るのは収量であるため、指導所では今後、収量・品質調査を行い、導入のメリットについて検証し、研修会を通じて情報提供するよう計画しています。

情報提供元

東部農業技術指導所